広島民報
2019年 11月24日 第2549号
月3回刊 日曜日発行
発行所 広島民報社
〒730-0013 広島市中区八丁堀8-11／電話(082)228-4046
(昭和41年2月19日第三種郵便物認可)
1ヵ月 240円(送料123円)／1部 80円
郵便振替 01330-2-34778
© 広島民報社 2019年

広島県議会決算特別委

中小企業や教育の問題で論戦

日本共産党・辻つねお議員

広島県議会で10月21、29、11月5、11日に、決算特別委員会があり、日本共産党の辻つねお議員は、中小企業や教育、農業、交通安全の問題について論戦しました。

中小企業振興費の大幅な増額を

辻議員は10月21日、昨年度の中小企業振興費（預託制度運用費を除く）が40億4706万円で、県内の中小企業の8万2962社で割ると、一社当たり、わずか4万878円しかないと指摘。「一昨年できた中小企業・小規模企業振興条例に基づき、予算を大幅に増やして対策を強化するべきだ」と要望しました。

商工労働総務課の今井洋課長は「中小企業者の意見を聞く体制ができたので、ご意見をいただきながら検討する」と答えました。

教育に穴があく事態に対策の強化を

29日に辻議員は、病気休暇の教員の代員を長期間配置できない問題を取り上げました。

2週間以上配置できなかった件数は昨年度、小学校で69件（期間の最大は竹原市の1件（最大は呉市の12月4日）。産前休暇の場合は事前に把握できるにもかかわらず、小学校で43件、中学校で10件もありました。

辻議員は「教育に穴が空く事態が10年前から続いており、改善していない。4月に新規採用者を増やす計画が出されたことは一定評価するが、予算も増やし、対策の強化が必要だ」と提案。教職員課の山田哲也課長は「学校に負担がかからないようしっかり取り組む」と答えました。

鳥獣被害対策の抜本的な強化を

11月5日に辻議員は、農業の鳥獣被害対策を強化するよう求めました。

広島県の耕作面積は全国27位の広さしかないのに、2017年度の鳥獣被害額は全国11位の4億円余で、特にイノシシによる被害額は全国2位となっています。辻議員は「市町との連携は進んでいるか」と質問しました。

農業技術課の出原寛之課長は「市町の体制が弱いため集落の課題が把握できず、職員の技術継承もできていない。最終的には行政ではなく、担い手に対策をやってもらいたい」と回答。辻議員は「中山間地域は担い手の高齢化が進んでおり、鳥獣被害は作物を作り続ける意欲を失わせる。行政による対策の抜本的な強化が必要だ」と主張しました。

信号機や横断歩道予算激減から増加を

11日に辻議員は、信号機や横断歩道による交通安全対策を強化するよう求めました。

県の交通安全施設整備費の予算は、この20年間で31億円台から21億円台に減らされ、とりわけ信号機の新設予算は1億8000万円から4500万円へ4分の1に激減。信号機設置の要望が昨年度、350件ありましたが設置数はわずか8基で、今年度は1基（11月13日現在）しか設置していません。

舗装道路100㌔当たりの信号機数の指標でも全国平均が20・7基に対し、広島県は15・2基と遅れており、辻議員は「予算を増やし、歩行者優先の交通安全対策にするべきだ」と要望。県警本部の高橋勉交通部長は「信号機の更新に重点を置きたい」などと答えました。

横断歩道については「摩耗して線が消えて危険だ」との苦情が各地で上がっているにもかかわらず、県内2万6000本のうち昨年度更新したのは2342本で1割にも届いていません。辻議員は「塗り直し基準を摩耗率75％から50％にし、対策を強化するべきだ」と求めました。

日本コリア協会が宣伝

「隣の国と仲良くしよう」

日本と朝鮮半島をめぐる問題を学んで友好を深める「日本コリア協会・広島」は10月27日、広島市南区のJR広島駅南口で「隣の国と仲良くしよう」と宣伝し、250枚のビラを配りました。

10人が参加して「民族こえて共に生きる」「人種差別反対」などと英語でも書かれたプラスターを掲げ、「日韓関係悪化の原因は、植民地支配と徴用工への人権蹂躙（じゅうりん）という歴史の事実に対して、日本政府がきちんと謝罪していないことにある」とハンドマイクで訴えました。

宣伝する日本コリア協会の人たち＝10月27日、広島市南区

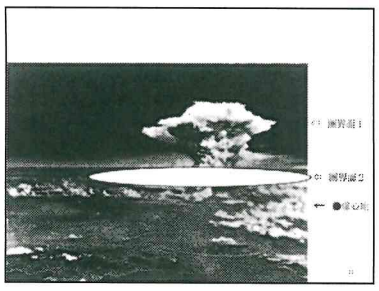
「黒い雨」訴訟

水平に広がる原子雲 メカニズムを解明

矢ケ崎、大瀧の両名誉教授証言

広島の原爆投下後に降った「黒い雨」で被爆した県内の男女85人が実際の降雨地域は国の援護対象地域の6倍も広かったと訴えている訴訟は10月16日、広島地裁で口頭弁論があり、琉球大の矢ケ崎克馬名誉教授（物性物理学）と広島大の大瀧慈名誉教授（統計学、放射線医科学）が原告側証人として証言しました。85人は被爆者健康手帳などの交付を市や県に申請しましたが、国が援護対象とする大雨地域（長さ約19㌔、幅約11㌔）の外だとして却下されています。

矢ケ崎名誉教授は水平に直径36㌔まで広がった原子雲が発生し、その真下に「黒い雨」が降ったメカニズムを解明しました。



矢ケ崎名誉教授がパワーポイントで証拠として示した水平に広がる原子雲の写真

放射性微粒子が上昇 直径36㌔の原子雲

原子雲は、爆発した高温の火球が10分間で15㌔もの速度で上昇し、その中心軸に放射性微粒子を巻き上げて発生しました。矢ケ崎氏の解明によると、さく裂した火球は爆心から対流圏を上昇し、成層圏へ達した境い目（圏界面1）で、きのこの頭の形をした最上部の原子雲を発生させます。それから少し遅れて、対流圏には二つの圏域（上方の偏西風圏と下方の地表風圏）があり、その境い目（圏界面2）では、高温で巻き上げられた放射性微粒子が空気中の水の分子を凝着するなどして温度が低下。そのため上昇する浮力を失い、水平に直径36㌔まで原子雲が広がりました。

風で北北西に移動 大瀧雨域とほぼ一致

直径36㌔の原子雲は地上風に乗って北北西に移動し、その真下の範囲に「黒い雨」が降ったと矢ケ崎名誉教授は解明。その範囲は、広島市が2010年に「黒い雨」体験者1565人の被爆実態を調査した結果にもとづいて、大瀧名誉教授が国の大雨地域の6倍の広さに「黒い雨」が降ったことを示した雨域と、ほぼ一致します。

（2面へ続く）

地下水

今年も、これからのためにしかと記憶に刻むべき重要な出来事が多数ありましたが、昭和天皇「拝謁記」の公開はその一つでしょう◆初代宮内庁長官が天皇と交わしたやりとりを記録した手記ですが、それは、戦争への「反省」を述べながらも自己弁護を繰り返し、陸海軍の統帥者として侵略戦争に直接責任を負っていたことへの自覚が全く見られない裕仁の姿を、明示するものになっていました◆実際に戦後、記者会見で戦争責任を問われると、裕仁は「そういう言葉のアヤについては」良くわからないから「お答えできかね」ると言い、広島・長崎への原爆投下では「遺憾だけどやむを得なかった」と、惨禍を招いたことへの反省は全く感じられない返答をしています◆初夏から続いた憲法原理に反する天皇代替わり儀式を、マスコミはひたすら垂れ流し、憲法中に天皇と国民主権が同居する矛盾は、ますます広がっています。その解消にむけて私たちに強く求められる努力の一つが、昭和天皇の戦争責任を問う旺盛な議論です。（ま）